

保育所づくり運動における親の主体形成 — ヤジエセツルメント保育所の文集『レンガの子ども母親特集号』を 手がかりとして —

The Process of Forming the Subject in Parents: Focusing on the Yajie Day Nursery from 1959-1962

平野華織
Kaori HIRANO

抄録：本研究は、災害等の非常時の保育実践における事例の1つとして、1959（昭和34）年9月の伊勢湾台風被災後に名古屋市南区弥次衛町の応急仮設住宅内で無認可の臨時託児所として出発したヤジエセツルメント保育所での取り組みを取り上げる。分析対象とするのは、調査の過程で新たに発掘したガリ版刷りの園だより『レンガの子ども』や文集『レンガの子ども—母親特集号—』などの1次史料である。後年何度も版を変えて発行された単行本『レンガの子ども』には収められていない記録等も数多く見られるため、同書の記述だけに基づいてなされた先行研究の限界を克服できるものとする。1次史料の分析をもとに、保育者が文集『レンガの子ども—母親特集号—』を継続的に発行することや、「父母の会」等などの行事を行うことが、保育所づくり運動における親の主体形成に果たした役割を仮説的に示した。

キーワード：父母の会、保育所づくり運動、伊勢湾台風、セツルメント

はじめに

本研究は、災害等の非常時の保育実践における事例の1つとして、1959（昭和34）年9月の伊勢湾台風被災後に名古屋市南区弥次衛町の応急仮設住宅内で無認可の臨時託児所として出発したヤジエセツルメント保育所での取り組みを取り上げ、保育者が文集『レンガの子ども—母親特集号—』を継続的に発行することや、「父母の会」等などの行事が、保育所づくり運動における親の主体形成に果たした役割を明らかにするものである。

同保育所の実践については、これまでも「歴史的な遺産」として注目され、社会福祉研究では真田是や高島進、浦辺史、浅井純二らが、教育学研究では小川太郎や宍戸健夫らがいくつかの成果を公にしている。「愛知の保育の原点」であり「その後の保育所づくりの活動も、保母の労働組合の活動も、保育研究活動もすべてヤジエが原点であった」¹⁾と評されるその実践は、『レンガの子ども』(1963)としてまとめられ、出版社を変え今日まで5冊公にされてきた。保育分野では、創造的な保育方法を開拓したものとして、日本の保育史上に記録されるべきものであり²⁾、名古屋保育問題研究会が誕生し発

展・継承していく原動力となったとも言われている実践である³⁾。

しかし、管見による限り、それらの視点はあくまで幼児保育の事例だけを対象としたものが中心であって、保育所づくり運動の実践事例として深く切り込んで分析しているものはほとんど見られない。また、本研究で分析対象とするのは、調査の過程で新たに発掘したガリ版刷りの園だより『レンガの子ども』や文集『レンガの子ども—母親特集号—』などの1次史料であり、後年何度も版を変えて発行された単行本『レンガの子ども』には収められていない記録等も数多く見られるため、同書の記述だけに基づいてなされた先行研究の限界を克服できるものとする。

本論文では、そうした観点から、文集『レンガの子ども—母親特集号—』に掲載された、園児の親の心情の変化、保育所づくりにむけた父母集団の変容などへと着目し、公立保育所建設に至るまでの運動過程を追う。それを通して、1962（昭和37）年『レンガの子ども ぶんなぐり保母の記録』⁴⁾が発行されるまでの空白時期を埋めるとともに、同書の記述で欠落している部分の復元も試みてみたい。以下、本論分で採用する時期区分は、文集

『レンガの子ども－母親特集号－』の発行状況と保育所づくり運動の展開に即して、便宜上次のように設定する。

- 第1期 ヤジエセツルメント保育所発足から文集『レンガの子ども－母親特集号－9月のまとめ』作成時期（1960年2月7日～9月末日）
- 第2期 文集『レンガの子ども－母親特集号－10・11月のまとめ』作成時期（1960年10月～11月）
- 第3期 文集『レンガの子ども－伊勢湾台風の記 母親特集号 No.3－』と文集『レンガの子ども－母親特集号 12～3月のまとめ』作成時期（1960年12月～1961年3月）

I. 保育所づくり運動とヤジエセツルメント保育所の発足

1. 高度経済成長下における保育所づくり運動

1950年代から1960年代にかけて、各地で大きな盛り上がりを見せた保育所づくり運動の時期は、高度経済成長の時期と重なる。1950年度は公私合わせた保育所数は2,971ヵ所であったのが、1960年度は9,782ヵ所へとおよそ3倍の増加をしたとはいえ充足にはほど遠く、結婚し出産を経て、子どもを育てながら働き続けようとする母親たちによる保育所要求は高まっていた⁵⁾。この時期、働き続けたい母親が中心となって職場内保育所を設置したり、地域の要求を結びつけ、公立の保育所をつくらせた経験がいくつもある。例えば、大阪府枚方市香里団地において幅広い住民組織が中心となり、約2年にわたる運動の末、62年7月に保育所建設に至った香里保育所づくり運動は、『私は赤ちゃん』（岩波新書、1960）の著者である小児科医松田道雄が関わったこともあり、同時代の注目を集めた⁶⁾。また、1950年代からはじまった全通信労働組合婦人部、全国電気通信労働組合などの民間団体、病院、大学などにおける職場保育所づくり運動は、各地に影響力をもち、その後の全国の地域に広がる保育所づくり運動の火種となるのである⁷⁾。保育所づくり運動の形態について、浦辺史は次のような3つに類型化している⁸⁾。

(1) 働く母親たちが自ら共同保育所をつくり、自治体に対して補助金を要求はするが、保育所の運営はあくまで母親と保育者が主体となり、民主的にその伝統を維持していく。

(2) 地域の保育要求をみたら責任はあくまで自治体にあるとし、働く母親の保育要求を実現するため保育所設立要求運動を通して公立保育所をつくらせることを目的とする。それまでは臨時的共同保育所で間をつなぐが、公立保育所が実現すると施設運営や人事は自治体が担うことから、親たちの保育運動で培われた伝統は断ち切れてしまう。

(3) 共同保育所を民間の認可保育所として発展させて

経営の安定をはかり、共同保育所の民主的伝統を生かし、親たちを組織的に運営に参加させ、質の高い保育実践を続ける。

ヤジエセツルメント保育所は伊勢湾台風の救援活動を行っていた学生らの手で1959年12月24日臨時保育所として開設し、翌年2月7日正式発足、1962年8月15日に名古屋市立宝保育園の開園式をもって約2年8ヶ月の実践に幕を下ろすが、ヤジエセツルメント保育所実践が創造した理念や経験、保育理論の伝統は断ち切れず、今なお語り継がれている。その意味において、学生セツラーによって立ち上げられた、被災地の臨時保育所の父母らの保育所づくり運動は、それまでの保育運動の性格を捨て、新しい意味と役割をもつことになったといえよう。

2. 伊勢湾台風とヤジエセツルメント保育所

父母らを保育所づくり運動の主体へ導く過程を示す前に、ヤジエセツルメント保育所設立の経緯と、その契機となった伊勢湾台風の被害状況について触れる必要があるだろう。まず、その作業を行っておきたい。

1959（昭和34）年9月24日、伊勢湾台風は、名古屋市とそれに隣接する愛知・三重・岐阜を中心に、人的被害においては死者4,764人、行方不明213人、負傷者38,838人という莫大な被害を生じた。被災世帯数は354,135世帯、被災者は1,615,804人であり、このため、災害救助法の発動された市区町村は563に及んだ⁹⁾。特に名古屋市は人的・物的ともに未曾有の被害を被った。激じん地指定をうけた南部5区（南・港・中川・熱田・瑞穂）の被害は大きく、高潮のため各河川や堤防が決壊し、南部一帯は水浸しとなり、排水に約1か月半もかかったことから被害は倍加された¹⁰⁾。中でも南区は大半の地域が浸水し、かつその期間も20日～25日間と長期にわたり、また物資・人員ともに不足しがちで、被災者に対する救援活動は困難を極めた¹¹⁾。

被災後の混乱のなか、率先して被災者救援に立ち上がったのは、地元の大学生、高校生はもちろん、遠くは東京や京都の学生であった¹²⁾。彼らは物資の配給、避難所への被災者の収容、遺体の収容・搬送、さらには排水後の被災地への救助物資・支援物資の輸送や現地の配給等、多岐にわたり献身的に奉仕した¹³⁾。この間、大学の社会福祉・保育系学生の保育による救済活動が活発に展開され、10月2日～27日には日本福祉大学と名古屋市立保育短期大学生有志、市内保育所保母らが笠寺小学校に臨時保育所を開設し、延べ576人の児童の保育をはじめた。これを含む市内各小・中学校避難所16か所に臨時保育所がひらかれ、これらの保育活動には愛知県立女子大、日本福祉大学の職員・学生、名古屋市立保育短大の学生有志などが参加した¹⁴⁾¹⁵⁾。しかし、応急的、臨時的な保育活動はいずれも災害の復旧とともに10月末をもって終了し、保育所のない地区に保育所作りの活動へ発展していったのは、南区弥次衛町仮設住宅におけるヤジエ

セツルメント保育所のみであった¹⁶⁾。

被災そのものに階級性があることを鋭く見抜き、被災者の社会問題を追及しようとした名古屋大学教養部災害対策委員会がサークル「泥の会」を結成し、南区弥次衛町仮設住宅で生活調査を行ったのは12月13日のことである。生活復旧において最も要望が強かったものが「託児所」であった。日本福祉大学保育研究室、市内各大学生らの協力があり、後援会の組織準備、全国からの資金カンパの見通しができ、臨時保育所開設を通して「被災者の組織化による恒久的民主的保育施設の建設」を目指した、ヤジエセツルメントが発足したのである¹⁷⁾。

一世帯八畳一間が302戸集まり、12戸に一つの共同便所と共同炊事場があるだけの仮設住宅の中で、市有の旧養鶏場の空事務所20坪を借り受け、ヤジエセツルメント保育所が開所したのは12月24日のことであった¹⁸⁾。しかし、学生セツラーによる保育では、試験期間の人手不足や保育技術の貧しさがあることから、愛知県立女子大学講師の宍戸健夫を通して東京保育問題研究会へ保育者派遣の要請がなされ、及川嘉美子、難波ふじ江が来名し、本格的な保育実践が開始された。後に発行される、園だより「レンガの子ども」、父母の文集『レンガの子ども—母親特集号—』を通して、2人の保育者には東京保育問題研究会の中心であった乾孝、及川の勤めていた豊川保育園園長で「伝え合い保育」の研究実践で知られる畑谷光代らのスーパービジョンがなされたことで、東京で培われた保育者らの経験がここで発揮され、以下に述べるような活動として開花されたのであろう。

Ⅱ. 冊子『レンガの子ども—母親特集号—』の発行

1. 第1期『レンガの子ども—母親特集号—9月のまとめ』

ヤジエセツルメント保育所は「スラム化してゆく伊勢湾台風被災者の仮設集団住宅のドマンなか」¹⁹⁾で、十分な設備もない中、約30人の幼児を二人の保育者で受け持ち、これに学生セツラーや日本福祉大学保育研究室が協力してその活動を開始した。しかし、その活動は順調なものではなかった。「親の教育と地域の文化から見放された」「ヤジエの子どもたち」は、「保育者もはじめは手のつけようもない粗暴さを身につけて」いたからである²⁰⁾。なぜなら被災家庭は復旧作業に忙しく、被災した子どもは遊び場を失い、忙しい親に構ってもらえないことから、そのやりきれない気持ちは反抗したりだだをこねたりするという形であらわれていた²¹⁾。

そのような中、7・8月の仮設住宅内の赤痢発生騒動が落ち着いた1960年9月2日から、2人の保育者と親をつなぐ毎日の連絡帳がはじまった。後に発行される文集『レンガの子ども—母親特集号—9月のまとめ』は、その連絡帳の内容を抜粋して作成されたものである。全体はB5版78ページにわたり、目次にあたる頁には11名の

子どもの名前が掲載され、次頁以降それぞれの連絡帳でのやりとりの内容が掲載されている。ガリ版刷りのその誌面は各ページが縦書き2段組のレイアウトであり、上下の仕切りにレンガ模様が中央に描かれていて、子どもたちの書いた3匹のぶた等のイラストが挿絵として飾られている。連絡帳の冒頭、「れんらく帖の表紙のことば」として及川と難波から父母へ、以下のように呼びかけられた。

考え合いましょう

—子どもの正しい成長のために—

こどもたちは保育園で どんなことをしているかしらとお家の方たちは思っていることでしょうか 私たちも お家に帰ってから子どもたちはどんなことをしているかしら と考えます

そこで子どもたちの様子が お互いにわかるようこのノートをつくりました

よい子を育てるためには どうしたらいいか お互いに考えあってゆきましょう

連絡帳は多くの場合、保育園の子どもの様子を親へ伝え、親は家庭の様子を保育園へ伝え、往復することが役割とされているが、ともすれば一方通行になりがちである。そこを補うため、ヤジエセツルメント保育所の連絡帳は上記のように「よい子を育てるためにはどうしたらいいか お互いに考えあってゆきましょう」と呼びかけることで「お互いに人間を育てている者として、子どもの持っている能力を、最大限に伸ばしてやりたいと願っている者として、平等な立場で考え合ってゆこうとする姿勢」をみることができ²²⁾。巻頭言は、保育者の及川嘉美子、難波ふじ江、日本福祉大学保育研究室から派遣された土方弘子の連名で、次のような「保育者のことば」が掲載されている²³⁾。

“みなさん どんなこと連絡帖に書いておられますか”二・三のお母様方からこんな声をきき連絡帖をはじめから書かれた九月の一月分をまとめて「レンガの子ども」の母親特集号として皆様に読んでいただくことにいたします。

連絡帖に書かれています内容が一人のお母様と保育者だけの問題で終わらせることなくみんなの問題として考え合われ話し合われるきっかけとなります事を願っております。

被災地の無認可臨時託児所という条件の下では、保育者、父母、地域の三者が連携を抜きにした保育活動は考えることはできない²⁴⁾。生活再建に奔走する応急仮設住宅の父母が、わが子、保育所、地域に関心を向けるのは容易ではないことを、二人の保育者は十分認識していたであろう。連絡帖に何も書かない親へ及川は「このノー

トおよみになっていますか？およみになったらかならず印をおしてください。そしてなにかチョットでもかいて下さいませんか²⁵⁾と促している。連絡帖の内容を共有することで、父母も保育者と一緒に子どもを育てているのだという自覚を生み、さらに発展して、家庭におけるわが子との向かい合い方や他の家の子どもに対する見方も変わり、「自分の子ども」から「ヤジエの子ども」へと関心が進んでいく意図がみえる²⁶⁾。

2. 第2期「レンガの子ども—母親特集号—10・11月のまとめ」発行まで（1960年10月から11月）

母親特集号としての第二号は、目次に18名の子どもたちの名前が並び、保育者は第一号発行の成果を次のように巻頭言で述べている。

「母親特集号」の第一号を出すとき、「連絡帖を公表するなんて…」と、小さな反対をなされたお母様もいらっしゃいましたが、出来上がった特集号を、読み合っ、お母様方と反省会を持ちましたとき、やっぱり特集号を出したのは良かった、同じ子どもを持つ母親としての苦勞や喜び、そしてみんなの考えていることや願っている事がよくわかり合えた第三号も続けて出そう。…ということが話し合われました。

第一号によってお母様方の結びつきも深まり、今まで書かれなかったお母様方もどんどん書いて下さり、大勢の方々のご協力によって、ここに第二号が出来ました事を、大変うれしく思います。

この第二号が 子どもたちを守り育てるために、お母様方の結びつきが更に深められてゆきます事を、心から願っております。

第一号が父母にどのように受け止められたのか、その様子はある母親が11月29日の連絡帖に次のように記している。「『母親特集号』大変面白く拝読致しました。と同時にいろいろな角度から見て、参考になったと思っております。十月、十一月号と追って出版して頂いてもよいと私は思うのですが²⁷⁾。また別の母親は「母親特集号、非常に熱心に記録されている方が多いのに感心いたしました 子を想う親はそれぞれ表現は異なる事でしょうが健やかに伸び伸びと育ててくれることを希う（原文ママ）のには変わらない事を、そしてどの記録（連絡）の中にも個人の云々ではなく社会（集団）生活の訓練の必要さを希って（原文ママ）いられるように感じました²⁸⁾」としている。さらに、個別の連絡帖に寄せられる感想以外に、12月2日夜7時より、新役員の親を中心に父母の会にて反省会をもち、保育所運営や子どもの様子とともに、これからの特集号を出すのかどうか話し合いがなされた²⁹⁾。予想以上の反響であった母親特集号第一号は保育者の及川によれば「昨夜の父母の会、本当に楽しい一

夜でした。十二月一杯でこの保育園がつぶれるかもしれないと考えていたのですが、お母様方のあんなに力強い発言に、すっかりはげまされ、よし、がんばらなければ、と思いました」という³⁰⁾。こうして、続く母親特集号第二号は10・11月の連絡帖がまとめられ、1960（昭和35）年12月26日、発行された。

一方、保育園づくり運動主体としての母親集団の意識は、母親特集号の発行と平行して、「父母の会」を中心とした夜の行事において醸成されていくことになる。「父母の会」は1960年9月17日の夜に、第1回目が開かれた³¹⁾。その内容は、「今迄は、方々からのカンパでまかなってきた」のだが、「もうそんなものに頼ってられなくなり」、「人件費を出してくれている後援会の見直しもはっきりしない」ままでは、保育園の存続は危ういと報告がなされた。それは、当然のことながら、学生セツラーが立ち上げた無認可の臨時託児所であるヤジエセツルメント保育所における限界にほかならなかった。また、この時期「父母の会」と平行して、誕生日会（9月30日）、運動会（10月28日）、クマのぬいぐるみづくり講習会（11月5日）退園児のお別れ会（11月25日）など、娯楽を含む内容でも開催されており、運動会以外は父母の集まりやすい夜に企画され、多岐にわたる活動が積極的に開催されていたことがわかる。

そうした中で、特に注目すべき点は、1960年11月25日の退園児の「お別れ会」において、父母の会役員とは別に「運営委員」が3名選出されたことであろう。これは、「今まで全部学生さん達でやってきた」が「今度から、学生と保母とお母さんたち」と、「ヤジエセツルメントに毎月お金を出して下さっている後援会」等の代表が集まり、「この保育園を、これからどういうふうにしていったら良いかを相談する」ためである³²⁾。それ以降、公立保育園建設に向けた市交渉の中心となるのが、この時選ばれた運営委員の母親たちであった。

3. 第3期「レンガの子ども—伊勢湾台風の記 母親特集号No.3」「レンガの子ども—母親特集号 12～3月のまとめ」（1960年12～1961年3月）

被災地の無認可臨時託児所の実践に目をつけたNHKの取材を受け、12月5日夜十時半から全国放送をされるやいなや、ヤジエセツルメント保育所の取り組みは全国に大きな反響をよんだ。及川が「南区区長と福祉事務所長あてに手紙を出し」、園児の「クリスマスプレゼントを交渉してみよう」とする一方、母親のひとりが朝日新聞の「ひと、き欄」へ投稿し実情を訴え、両者の活動がまとまりをみせはじめた³³⁾。母親たちが自主性や責任感を見せるようになったことを、及川は「心細く思っていた」が、母親かが積極的に参加し、意見を出すようになったことをに「何か安心してやってゆける喜び」を感じたという³⁴⁾。

こうした中で本格的な保育所づくり運動へ大きな一歩

を踏み出したのは、12月9日夜の「父母の会」において、14日名古屋市への交渉が決まったことであろう。園を代表して運営委員の母親2人が初めて名古屋市役所へ補助金の交渉へ行った様子を「市との交渉、やはり持っただけの効果があったと思います。…交渉にたいする自信を持つことがでただけでも大きな収穫だったと思って」と述べて³⁵⁾。続く21日は運営委員の母親2名と後援会委員とともに再び市へ保育園運営費の再交渉へかけ、ついに来年1月～3月まで月々2万円ずつ援助を勝ち取ることができた。

そのような中、伊勢湾台風の経験を共通のテーマにした第三号の原稿用紙が父母へ配布されたのは、1961年1月10日のことであった。それは「伊勢湾台風被災当時の事、そしてその後の生活から今迄のこと、生き方や子供達の希望等³⁶⁾」を綴り、父母や地域、一般の人と分かち合う趣旨であった。日本語が書けない者には保育者が代筆して、20人すべての園児たちの家族（父親5人、母親12人、兄2人、姉1人）が筆をとり、400字～3000字でその日のことを実に生々しく記した。しかしそれは単純に被害の悲惨さばかりが強調されるのではなく、つらさの中に奮起と希望が見出せる内容もあった。この文集において、すべての家族が自分の体験を具体的な文章で書くという行為、そしてそれを他者と共有するといういとなみは、親集団としての横のつながりをより強固にするのに大きな弾みをつけたに違いない。全73ページに及ぶ文集の表紙デザインは日本福祉大学保育研究室の土方康夫教授、印刷・製本・カッティングは18名の学生セツラーによってなされ³⁷⁾、1961年2月14日発行された。それらのなかには、自分たち「被災者」こそが、連帯して社会を変え、幸せな新しい社会をつくってゆくのだからというメッセージが一貫して込められていた。

その時期、2月に入り弥次衛町仮設住宅に「婦人会」が結成されたことは、保育所づくり運動において大きな転機となった。「婦人会」の運動は主に「ここ仮設の後に私たちの住宅を市で建てさせる」と市営住宅建設要求をすることで、同じ敷地にあるヤジエセツルメント保育園も恒久的な施設となるべき正当性を主張できる見通しになったのだ³⁸⁾。これまで保育園運営資金の獲得が主であったが、ここにきて、公立保育園建設要求運動の方向へ舵をきることになった。24日の夜開かれた「父母の会」では早速「私たちの願いを市の人に知ってもらうため」に「二十七日、午前十時、六名の母親が『台風特集号』をもって市役所に行く」ことを決定している³⁹⁾。しかし盛り上がったのは東の間、当日は「代表に予定されていた4名の母親は都合が悪くなってしまい」、及川と2名の母で第3号の文集をもって話し合いにでかけることになる⁴⁰⁾。この時期は父母集団としてのまとまりはまだ安定したものではなかった。

父母集団が積極的に加わり、市交渉が活発化したのは、7月5日の頃である。そして「ヤジエセツルメント

保育所を必要と認め、措置費を支給せよ」と交渉し、1ヵ月5000円のおやつ代、11月まで、計5万円の補助金を獲得するとともに、ついに8月19日、南区に市立保育園設置を認めさせたのだ⁴¹⁾。しかし残念ながら、文集として記録されている連絡帳は1961年4月以降、文集化させることはなかったことから、その運動の内実を確認することは困難である。しかし、9月11日に発行された、父母の文集としては4冊目となる『レンガの子ども－母親特集号12～3月のまとめ』の巻頭言は次のようにある。

チッポケなたったひとつの保育園を みんなの力で守り育てるといことは なんと大変なことかーとこの記録をよみかえし あらためてそう思ったことです この中には資金難にあえぎはじめて名古屋市府役所へ交渉にいったときの話、寒さをむかえストーブや薪の心配をみんなでしたときのこと 父母の会をどう強化したらよいかと考へ合ったこと 又、松川事件をどう考へるかといった社会問題まで目を向けていったことなどが書かれています この一つ一つがよい子を育てる上にどんなにかかわりあいをもっているのか お母さん方は考へてきました…(中略)… “家の子”という狭い個人主義的な考へ方から “子どもたち”と広く全体の子どもをさして問題をとらえる集団主義的な考へ方に成長してきたお母様方のこの力が 子どもの教育をはばむあらゆる矛盾と戦ってゆけるお母様方に前進してゆくことを期待しています

文集作成の過程には、「二人の保育者のきびしく激しい自己変革のたたかいがあるし、毎日の連絡帳、保育所日より、家庭訪問、父母の会などにおける保育実践を素材としての父母の変革のたたかい⁴²⁾」があったといえよう。「子ども預かり所」から「未来を支える子供を教育する場としての保育所」に大きく変化させられた父母の意識は、父母の会の自主的な保育所運営へつながり、さらに公立保育所づくり運動の母体として変容していったのである⁴³⁾。

Ⅲ. 父母と保育所づくり運動

他の臨時保育所と異なり、単なる復旧活動で終了せず、保育活動を通して母親を組織化し、恒久的な保育所建設を求めていく運動を展開する至った要因を仮説的に提示すれば、次のようになる。

仮設住宅住民からの要望を汲み取り、学生セツラーと外部支援者が設立した無認可の臨時保育所であった故、開始当初の母親の保育所に対する関心は低いものであった。しかし、東京保育問題研究会から派遣された2名の保育者が「連絡帳」を導入し、家庭の様子、保育所での様子を知ることから、母親が「わが子と向き合い」「子

どもに関心をもつ」ことが急速に促された。また、それに「家庭訪問」も加わり、保母と家庭との双方向な道もつくられた。さらに、夜間の行事「誕生日会」「父母の会」において、保育所運営への問題意識の醸成、関心のひきつけがなされ、『レンガの子ども母親特集号』の発行は、文章を通して他児の父母への「共感」と「連帯感」を高め、市立保育園建設運動に向けた組織化へ動機付けることにもつながった。

そうした一連の「集団思考」形成の仕掛けにより、母親たちは地域の保育問題に気づき、それを自分たちの力で解決することができる、自律した母親組織に成長することができた。そのプロセスについては、1960(昭和35)年前後の社会的・思想的背景に規定されている限界の部分も少なくないが、今日の「保護者支援」のあり方を見直す上で学ぶべきところも多いであろう。

おわりに

伊勢湾台風という特別な条件のもと、偶発的に行われた保育に過ぎないのであれば、他の臨時保育所と同じく短期間でその活動を閉じ、存在も忘れ去られたであろう。本実践が後世にまで語り継がる要因は、「かつてのヤジエ地域の子どもたちに対する保育を読みとるのではなく、現在の、保育者たちが担当している身近な子どもに対する保育とひきくらべ、現在の保育のあり方を探り読む」⁴⁴⁾ことができ、現代の保育にも示唆するものが多くあるからであろう。特に、保育所と保護者・家庭との連携に関しては、浦辺史により「(父母との)連絡帳をつけとおしたなみなみならぬ努力、そのことによって多忙な母親たちの潜在化している教育要求をひきだし、保育所への関心をたかめ、みずからものを書き、集団思考をとおして社会的自覚をよびさました生活綴方的教育方法による母親教育の実践をこころみた」⁴⁵⁾と高く評価された点が、そこに内包されていることは看過できまい。

このように優れた保育実践として知られているヤジエセツルメント保育所だが、保育所づくり運動としては「失敗の運動史」という負の側面も押さえるべきであろう。前述した先行研究では、公立保育園建設につながった点を高く評価しているが、請願運動により7,411名の署名を集めたにも関わらず、及川・難波を市立保育園保母とする採用要求は拒否されたことについて深く切り込んではいない。一番ヶ瀬康子は、「運動史の多くが、いわゆる成功のそれのみに、かたよりがちであり、「挫折あるいは失敗のそれが、史料的にも見出すことが困難なためでもあろうが、ともすればかくされがち」であったし、「成功あるいは失敗いずれも、その条件と原因あるいは問題について、可能なかぎりより正確に記す努力」が必要であると指摘していた⁴⁶⁾。本実践においては、公的な保育施設の獲得という点においては成功したが、これまで積み上げてきた伝統的な保育文化が引き継がれ

たかどうかは定かではない。今後は、そうした一番ヶ瀬の指摘に学び、ヤジエセツルメント保育所実践の評価を相対化した上で、保育所づくり運動による活動実態や保育思想などの再検証・評価を試みたい。

〔注〕

- 1) 土方康夫(1974)「たたかひの記録としての『レンガの子ども』」『レンガの子ども』さ・さ・ら書房 p250
- 2) 浦辺史(1963)「保育運動からみた『レンガの子ども』」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども』竹川出版 p3
- 3) 穴戸健夫(2009)「序にかえて『レンガの子ども』の再版を祝す」河本ふじ江、原田嘉美子『レンガの子ども』ひとなる書房 p7
- 4) 河本ふじ江、原田嘉美子(1962)『レンガの子どもぶんなぐり保母の記録』光風社 pp1-224
- 5) 松島のり子(2015)『「保育」の戦後史 幼稚園・保育所の普及とその地域差』六花出版 p119
- 6) 和田悠(2011)「ジェンダー視点から戦後保育所づくり運動史を問うー1960年代の大阪府枚方市香里団地を事例にー」日本オーラル・ヒストリー研究第7号 pp25-26
- 7) 橋本宏子(2006)『戦後保育所づくり運動史ー「ポストの数ほど保育所を」の時代』ひとなる書房 pp87-95
- 8) 浦辺史(1970)「日本におけるソーシャル・アクションの現状ー保育所づくり運動の視点からー」社会福祉研究 No.6 p7
- 9) 名古屋市(1994)『伊勢湾台風災害誌(復刻版)』竹田印刷 p39
- 10) 同上 p48
- 11) 同上 p270
- 12) 同上 p258
- 13) 同上 p270
- 14) 高島進(1997)「伊勢湾台風災害と社会福祉」社会事業史研究第25号 p89-90
- 15) 名古屋市(1994)『伊勢湾台風災害誌(復刻版)』竹田印刷 pp342-343
- 16) 高島進(1997)「伊勢湾台風災害と社会福祉」社会事業史研究第25号 p90
- 17) 東新家宏一(1960)「弥次衛セツルメントーセツラー意識の奥にあるものー」被災学生を守る会『伊勢湾台風』被災学生を守る会事務局 p163-170
- 18) 同上
- 19) 浦辺史(1970)「保育運動からみたレンガの子ども」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども(改訂版)』荒川印刷 p3
- 20) 土方康夫(1970)『「レンガの子ども」と現在』名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども(改訂版)』

- 荒川印刷 p237-245
- 21) 久世妙子・土方康夫(1960)「伊勢湾台風による被災保育所をめぐる問題」社会事業 43(5) pp43-49
 - 22) 土方弘子(1963)「『レンガの子ども』の保育者たち」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども ヤジエセツルメント保育所の実践と理論』pp271-272
 - 23) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 9月のまとめ』p2
 - 24) 土方康夫(1970)「『レンガの子どもから学ぶ』名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども(改訂版)』荒川印刷 pp230-231」
 - 25) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 9月のまとめ』p8
 - 26) 土方弘子(1963)「『レンガの子ども』の保育者たち」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども ヤジエセツルメント保育所の実践と理論』pp272
 - 27) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 10・11月のまとめ』p61
 - 28) ヤジエセツルメント保育所(1961)『レンガの子ども -母親特集号- 1960年12月から1961年3月までのまとめ』p10
 - 29) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 10・11月のまとめ』p61
 - 30) ヤジエセツルメント保育所(1961)『レンガの子ども -母親特集号- 1960年12月から1961年3月までのまとめ』p115
 - 31) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 9月のまとめ』p23
 - 32) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども -母親特集号- 10・11月のまとめ』p69
 - 33) ヤジエセツルメント保育所(1961)『レンガの子ども -母親特集号- 1960年12月から1961年3月までのまとめ』p117
 - 34) 同上 p118
 - 35) 同上
 - 36) 同上 p31
 - 37) ヤジエセツルメント保育所(1960)『レンガの子ども伊勢湾台風の記-母親特集号- No.3』p72
 - 38) ヤジエセツルメント保育所(1961)『レンガの子ども -母親特集号- 1960年12月から1961年3月までのまとめ』p40
 - 39) 同上 pp174-175
 - 40) 同上 pp40-41
 - 41) 名古屋保育問題研究会編(1963)『レンガの子ども ヤジエセツルメント保育所の実践と理論』土電印刷 p290
 - 42) 土方康夫(1970)「レンガの子どもから学ぶ」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども 改訂版』荒川印刷 pp219-220
 - 43) 同上
 - 44) 同上 p237
 - 45) 浦辺史(1963)「保育運動からみた『レンガの子ども』」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども』竹川出版 p3
 - 46) 一番ヶ瀬康子(1994)『一番ヶ瀬康子 社会福祉著作集 第2巻 社会福祉の歴史研究』労働旬報社 p.303

The Process of Forming the Subject in Parents: Focusing on the Yajie Day Nursery from 1959-1962

Kaori HIRANO

Abstract : This paper analyzes the childcare movement for the establishment of the Yajie Settlement Day Nursery in Minami Ward, Nagoya City, after the area was struck by the Isewan Typhoon in 1959.

A copy of a memoir entitled “Renga no Kodomo” – written by Hahaoya Tokusyuugou – has recently been discovered in the library of the Yajie Settlement Day Nursery. Parents hoped that their requests for a nursery would help them to cope with the problems caused by the natural disaster. The effective childcare movement benefited the community’s children and helped in the organization of work to promote recovery.

Keywords : parent association, childcare movement, Isewan Typhoon, settlement